

イギリスにおける市民大学の誕生と学士課程教育の理念

—バーミンガム大学の成立過程を中心に—

中 村 勝 美*

(2015年11月13日 受理)

The English Civic Universities and the Changing Idea of a University: With Special Reference to the University of Birmingham

Katsumi NAKAMURA*

In the late nineteenth century England, colleges were founded in the industrial city of the north. These civic foundations were not the result of any central initiative, but the work of local benefactors with their roots in industry and commerce. The earliest ones were all in the industrial cities of the north and midlands. Most of these colleges started with a strong scientific emphasis.

Because of limited financial resources and its lack of degree-giving status, the teaching was for part time and evening students, and the number studying for degrees were small. Birmingham gained its charter in 1900. It was largely owed to Joseph Chamberlain's effort. Civic universities created a distinctive conception of the University.

Keywords: Mason Science College メイソン科学カレッジ, civic university 市民大学, University of Birmingham バーミンガム大学

1. はじめに

イングランドの大学は歴史的に、教育と試験の機能を分化し、学外機関が学位を認定することによって、学位の質や水準を維持してきた。しかし、19世紀末には連合制大学を解消し、単独での大学昇格をめざす高等教育機関が出現し始めた。バーミンガム大学はイングランドの地方カレッジで初めて、連合制ではなく単独での大学昇格を目指し、実現した市民大学である。

ここでいう市民大学 (civic university) とは、別名「赤レンガ大学 (redbrick university)」とも呼ばれ、主として、20世紀初頭イングランドの主要産業都市に誕生した大学、バーミンガム大学、マンチェスター大学 (1903)、リヴァプール大学 (1903)、リーズ大学 (1904)、シェフィールド大学 (1905)、ブリストル大学 (1909) を指す^{注1)}。オックスフォード大学やケンブリッジ大学が全国から学生を集める「全国区」の大学であるのに対し、市民大学は都市と深く結びつき、地域の学生を教育し、地域の産業に役立つ研究を行い、人材を供給する地方の

大学であった¹⁾。

「赤レンガ」大学とは、ヴィクトリア時代に建造されたこれら大学の建材からイメージされた名称であり、なかでもバーミンガム大学の大ホールはその代表例といえる。市民大学は外見だけでなく、その教育理念も旧来の大学とは異なっていた。

本研究では、バーミンガム大学の前身であるメイソン科学カレッジの創設から大学成立期に焦点をあて、大学昇格運動の背景と、伝統的大学とは異なる市民大学の教育理念について明らかにする。

2. イングランドの大学における連合制原理

(1) 19世紀イングランドの高等教育

19世紀初頭、イングランドには中世大学として誕生したオックスフォードとケンブリッジのわずか二大学しか存在せず、他のヨーロッパ諸国と比較して、きわめて特異な状況にあった。

1830年代には、これら旧大学の宗教的、社会的排他性に対抗する新しい教育機関として首都にロンドン大学が、またイングランド北部における国教会派聖職者養成

* 広島女学院大学人間生活学部幼児教育心理学科教授

を主たる目的とするダラム大学が創設された。これ以降、1880年のヴィクトリア大学、1900年のバーミンガム大学創立までイングランドに新しい大学は設立されていない。市民大学が誕生するのは、20世紀を待たねばならないが、このことは必ずしも19世紀イングランドでは高等教育機会が著しく限定されていたということを意味するものではなかった。

イングランドの大学の法的地位は基本的に、民法上の法人（Civil Corporation）であり、大学としての認可を受けるためには、枢密院への請願・審議を経て国王より学位授与権を承認する勅許状（Royal Charter）を獲得するか、あるいは議会による個別大学法の制定が必要である。勅許状の取得によって、大学は永続性と独立性を確保し、学位授与権をはじめとする特権を認められる²⁾。

教育機関としての法人格の認可と学位授与権の認可は別々に行われる。そのため、歴史的には学位授与権をもたない多様な高等教育機関が存在し、これらの学校の多くはカレッジとよばれた。

学寮制大学として発展したオックスフォード大学およびケンブリッジ大学では、学位試験・学位授与を行う大学とは別に学寮として設立されたカレッジが教育機能をもつようになり、大学とカレッジが機能分離していった。

後にユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドンと改称する「ロンドン大学」が学位授与権を請願した際には、単体としての大学昇格は認められず、ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドンとキングス・カレッジ、ロンドンの医学校で学ぶ学生に学位試験・授与を行うための機関として、ロンドン大学が認可された。オウエンズ・カレッジの大学昇格運動の際も同様に、諸条件が整えばリー

ズ、リヴァプールのカレッジが加入することを前提として、連合制のヴィクトリア大学が創設された。

ロンドン大学とその他の大学ではカレッジと大学の関係に相違があるものの、当時のイングランドの人々にとっては、総じて「大学」と「カレッジ」のイメージはかなり異なるものであった。アイブス³⁾によると、大学とは学位授与を行う公的試験機関という意味合いが強く、地元の青少年に高等教育の機会を与えようとする篤志家はカレッジを設立するのが常であった。

（2）連合制原理による学位の質保証

学位授与における連合制原理とは、複数の教育機関（カレッジ）が一つの大学の傘下に入り、大学が同一の基準、シラバスにしたがって学位試験・学位授与を行うというものである。これは、イングランド特有の方式である。図2に示すように、ヨーロッパ大陸の大学やスコットランドでは、単一の大学が教育と同時に学位試験・学位授与を行うことが一般的であった。

ロスブラット⁴⁾によると、カレッジが「私的」団体であり、特定の地域のニーズや多様性に適合した教育を提供するのに対し、大学は「公的」機関としての性格を有していた。とりわけロンドン大学は、国家、国民、帝国の大学として、イングランドのみならず大英帝国全体の大学教育の達成度と学位の質を統制する役割を担った。アンダーソン⁵⁾は、イングランドにおいては中等教育改革が遅れ、19世紀末まで高等教育に対する需要はさほど大きくなく、大学志願者数の規模は小さかったと指摘している。

学位の質・水準の問題は大学間の競争と深く結びついている。新設されたばかりのカレッジはいずれも安定した収入を得るだけの学生数の確保に悩まされていた。そのため、カレッジ間で学生獲得を巡る過当競争が生じれば、結果的に学士課程教育の質の低下を招くおそれが



- : 1800 年以前に創設
- ▲ : 1800～1850 年に創設
- : 1850～1899 年に創設
- : 1900 年以降に創設

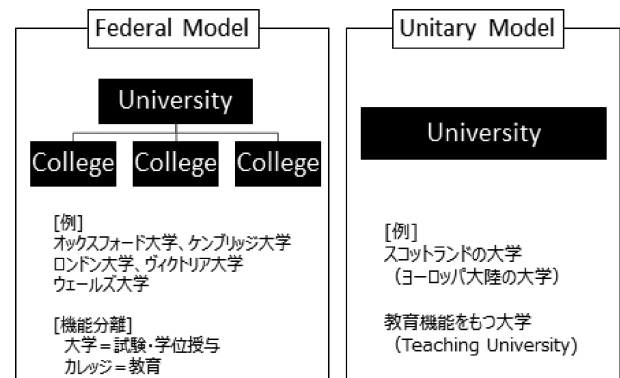


図2 学位授与における連合制大学モデルと単一大学モデル（筆者作成）

図1 20世紀初頭のイングランド・スコットランドの大学

あった。実際のところ、地方では17歳未満の学生を入学させ、ロンドン大学の入学登録試験の受験準備を行い、中等教育と大学教育の接続を担うカレッジも多く存在した。連合制大学による学位授与は個々のカレッジの事情に左右されにくいため、中等教育と学士課程教育の分化を促進し、学士課程教育の内容を標準化するよう作用した。

1858年のロンドン大学の学位試験開放は、地方に大学を新設するよりもはるかに安価な方法によって、学士課程教育の機会拡大を可能にした。

一方、連合制大学には、学外試験特有の試験と教育の分離から派生する諸問題も存在した。一つは、筆記試験は人間のもつ能力や達成度のある側面のみを評価するに過ぎないという批判である。オックスフォード大学やケンブリッジ大学の場合、学寮生活を通じた人格形成と教養教育の伝統によって詰め込み教育への批判は幾分和らげられた。しかし、受験指導講師の特訓や独学によって合格することができるロンドン大学の場合はそうはいかなかった。

もう一つは、試験がカリキュラムを規定することの弊害である。筆記試験の結果のみで学位が授与されるならば、試験に出ないことは学ぶ必要がない。学生を教育する教師がカリキュラムの作成や学生の評価に関与できず、学生や地域のニーズが教育内容に全く反映されないならば、カリキュラムは画一的で柔軟性を欠くものとなる。こうした批判は19世紀末にかけて次第に高まり、ロンドン大学改革運動や市民大学の大学昇格運動の原動力となった。

3. ユニヴァーシティ・カレッジの設立とバーミンガムの特色

(1) 第2次産業革命と高等教育

イギリスは世界で最初に「産業革命」を経験したが、よく知られるように新技術のほとんどは、大学の外で生まれた。しかしながら、19世紀後半には「第二次産業革命」と呼ばれる新しい技術革新が生じた。機械、化学、電機、鉄鋼など重化学工業の発達や資源開発、輸送手段の革新、産業の発達に伴う金融・会計など新しい専門職の拡大は、地方産業都市において高度な専門教育を受けた人材の必要性を高めた。ことにドイツ、フランス、アメリカの急速な経済発展は、イギリスの科学技術教育の立ち遅れを痛感させることとなった。

こうした産業の発展を背景に、1870年代から、イングランドの主要地方都市に、次々と高等教育機関が創設された。アームストロング・カレッジ（ニューカッスル：

1871）、ヨークシャー・サイエンス・カレッジ（リーズ：1874）、ブリストル（1876）、ファース・カレッジ（シェフィールド：1879）、メイソン科学カレッジ（バーミンガム：1880）、ノッティンガム（1881）、リヴァプール（1881）等がそれである。これらの教育機関はユニヴァーシティ・カレッジと総称された。

これらのユニヴァーシティ・カレッジ創設の直接の契機となったのは、科学技術教育の振興に対する熱意だけではなく、個人の寄付や大学拡張運動など多様である。1900年以降、いずれの都市においても、地域経済に恩恵をもたらす文化の拠点を創造することをめざし、「都市」の誇りをかけて、大学昇格運動が展開された。その先陣を切ったのがバーミンガムであった。

(2) バーミンガム市の地理的特徴と主要産業

バーミンガムはイングランドのウエスト・ミッドランズに位置する。現在、人口規模においてロンドンに次ぐイギリス第二の都市であり、商工業の一大中心地である。

バーミンガムは中世には中規模なマーケットタウンであった。しかし、18世紀にルナー・ソサエティが設立されミッドランズ・エンライトメントの中心地として栄え、非国教徒を中心とする知識人によって、18世紀以降の工業化が推進された。この地でジェイムズ・ワット（James Watt）はボールドン（Matthew Bolton）とともに蒸気機関を発明している。産業革命以降、北海、大西洋に通じる運河と、いち早く敷設された鉄道が交差する交通の要衝として繁栄した。

また、ミッドランズ炭田地帯と近隣の鉄鉱山からの天然資源、工業生産に必要な原材料と製品の大量輸送を可能とする交通網を背景に、バーミンガムでは金属・機械工業が発展し、ブラック・カンントリーと呼ばれる重工業地域の中核都市となった。

工業化とともに19世紀には人口が急増し、住環境が悪化した。バーミンガム大学創設者の一人といわれるチェンバレン（Chamberlain, Joseph, 1836–1914）は、バーミンガム市長として水道・ガスなどのインフラ整備に尽力し、スラムを一掃して道路・公園整備を行い、労働者の生活改善に努めた。

4. メイソン科学カレッジの創立

(1) 創設者ジョサイア・メイソン

バーミンガム大学の前身となるメイソン科学カレッジを設立したのは、地元の製造業者であるジョサイア・メイソン⁶⁾（Mason, Sir Josiah, 1795–1881）である。非国教徒のメイソンは貧しい織物業の家庭に生まれ、8歳から街頭でケーキを売り様々な仕事をしたが、ペン先を製

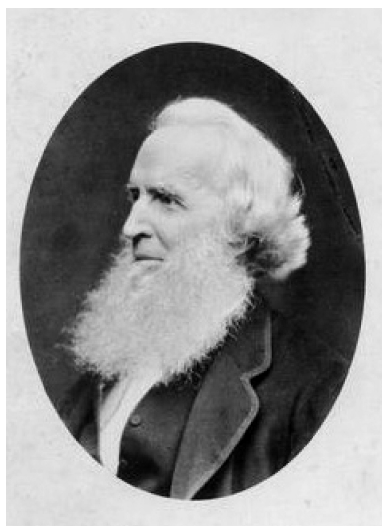


図3 ジョサイア・メイソン

(©National Portrait Gallery Henry Penn, 1870)

造する金属工業で大成功をおさめ財産を築いた。メイソンと妻の間には子どもがなく、かれは孤児院を創設するなど篤志家として活動した。晩年のメイソンによって行われたもっとも重要な仕事は、総額20万ポンドを費やした科学カレッジの設立である。

(2) 設立準備と初期の運営

メイソンは財団証書において、カレッジの目的について次のように述べている。

ミッドランズ地方、とりわけバーミンガムとキッド・ミンスターの製造業や産業で必要とされる実用的、機械的、技術的な事柄についての系統的教育 (systematic education and instruction) と指導を促進すること…単なる文学的な教育と指導ならびに神学および神学上の主題に関する教育を除外する⁷⁾

メイソンの構想は、地元の産業に寄与する実用的な科学技術教育カレッジを設立することであった。宗教と文学は本来、カレッジの教育から除外されるはずであったが、実際にはロンドン大学の試験シラバスに適合させる必要から、1881年に理事たちによって、教育内容を「科学、技術、言語、文学のあらゆる分野」に拡大するよう変更の手続きが取られた。

開設準備に携わり、理事を務めたのは、メイソンの法律顧問など大学運営の経験がない人々であったため、作業は難航した。構想から10年余りが経過した1880年10月1日、ハクスリ (Thomas Henry Huxley) を迎え開学の式典が執り行われた。このときの講演が有名な「科学と教養」である。

カレッジには、化学、物理学、生物学、数学、生理



図4 メイソン科学カレッジ

(出所：引用文献3)

表1 メイソン科学カレッジの年間損失額

(1881-86年：単位£)

| | 収入 | 支出 | 不足額 | 不足額の内訳 | |
|--------|------|-------|------|--------|-------|
| | | | | 経常損益 | 特別損失 |
| 1881-2 | 5476 | 12424 | 6948 | 841 | 6107 |
| 1882-3 | 7331 | 8095 | 764 | 4 | 1260* |
| 1883-4 | 6817 | 8175 | 1358 | 358 | 1000 |
| 1884-5 | 7309 | 8450 | 1141 | 578 | 563 |
| 1885-6 | 7086 | 8731 | 1646 | 1075 | 571 |

注) *500ポンドが創設者から補填された

(出所 引用文献3 p. 29.)

学、地質学・鉱物学、フランス語、ドイツ語、英語、ギリシア・ラテン語、工学の教授・講師が採用された。

初期のカレッジの運営は、恒常的に支出が収入を超過し、順調とは言い難いものであった。開学後の数年間は、授業のために必要な設備・校舎の不足と学生数の伸び悩みのため財政難が続いた。理事は政府補助金の増額を訴えたほか、地元の支援を取り付けるべく、建築コースや炭鉱学・鉱物学科を開設しカリキュラムの拡充を図った。地元の産業界にとって、夜間部の充実が必要とされたけれども、学生数を増加させるために、学士課程教育を行う昼間部に加えて夜間部を併設することは教師の大きな負担となった。

一方、カレッジはミッドランズ地方の高等教育界において中核的な地位を確立すべく、新たな事業にも取り組んでいる。一つは、バーミンガムに大学拡張講座のセンターを開設することであり、もう一つはバーミンガムの医学校クイーンズ・カレッジの合併 (1892年) である。医学校の合併はさらなる財政難を招いたが、これによっ

てカレッジは学士課程教育を提供する高等教育機関としての体裁を整えることができた。

(3) カリキュラム

1887年度の「要覧」7から、カレッジの教育課程の詳細についてみよう。

カレッジは、冬学期（10月～12月）、春学期（1月～3月）、夏学期（4月～6月）の3学期制で、学期末の休暇中に試験が実施された。

16歳未満の学生は入学前に試験を受ける必要があり、16歳以上の学生は試験なしで入学を認められたが、科目を選択する前に担当教授と相談することが勧められている。16歳未満の入学者に対する試験は、算数、英文法・書き取り、口答試験（ギリシア語、ラテン語、フランス語、ドイツ語から1科目選択）であった。入学者の年齢及び教育水準にはかなりの多様性があったことがうかがえる。

すべての学科において、男性、女性と同じ条件で授業を受講することができた。学生には、カレッジ内での静粛、禁煙（コモン・ルームを除く）、授業への出席、欠席時の届出等、細かな規則が定められていた。授業の受講料（1学期あたり）は、講義では1ポンド1シリングから2ポンド未満であったが、化学実験コースでは7ギニー（7ポンド7シリング）と実験・実習科目は高額であった。

カレッジの教育課程は基本的に、ロンドン大学が実施する学位試験の教科目に対応しており、ほとんどの科目で、入学登録試験、中間試験、学位試験の各段階に応じて初級、中級、上級のクラスが開講されている。それとは別に、英語・英文学科では、英文学に関する一般向けの講義コースが午後に、フランス語や数学、化学等は夜間クラスが開講されていた。学部・学科構成は表2のとおりである。

創設者メイソンが意図したとおり、学科構成においては科学に重点が置かれている。とくに、製造業に応用可能な化学や工学ではスタッフも教授、講師、実験助手と複数配置され、講義だけでなく実験、実習を充実させていた。鉱物学はロンドン大学の学位試験科目に含まれない。鉱物学科では、石炭鉱業の盛んなスタッフォードシャーに近いこともあり、鉱山技師や管理者、労働者のための実践的コースが開講されている。

一般的に、ユニヴァーシティ・カレッジにおいては、学生は学科に所属するわけではなく、必要な科目を学期ごとに選択し履修する。また、オックスフォード大学やケンブリッジ大学とは異なり、これらのカレッジでは、すべての学生が学士課程を修了し、学位を取得するわけ

表2 メイソン科学カレッジの学部学科（1887年）

| 学部 | | 学 科 | 科 目 |
|------------------|------|--------------|--|
| 人文学部 (Arts) | I | ギリシア・ラテン | ギリシア語 ギリシア文学 ラテン語 ラテン語作文 |
| | II | 英語・英文学 | 言語 英作文 歴史 文学・歴史 |
| | III | フランス語・フランス文学 | フランス語 フランス語会話 |
| | IV | ドイツ語・ドイツ文学 | ドイツ語 |
| 理学部 (Science) | I | 数学 | 純粋数学 応用数学 |
| | II | 物理学 | 一般コース 実験コース |
| | III | 化学 | 化学（講義） 有機化学 鉱物学 応用化学（実験） |
| | IV | 冶金学 | 講義・実験 |
| | V | 動物学・比較解剖学 | 生物学 実習 動物学（講義・実験） 発生学 |
| | VI | 植物学・植物生理学 | 生物学 植物学（講義・実験） |
| | VII | 生理学 | 生理学 応用生理学（講義・実験） |
| | VIII | 地質学・自然地理学 | 地質学 自然地理学 実験 鉱物学 地質調査 |
| | IX | 鉱物学 | 鉱物学課程 炭鉱学課程 特別課程 炭鉱労働者課程 |
| | X | 土木・機械工学 | 数学（講義・実験） 物理学（講義・実験） 無機化学（講義・実験） 地質学 工学（講義・実験・工場見学・調査・製図・実習） |

（出典 引文文献7, pp. 67-200より作成）

ではない。そのため、学部学科毎の学生数を比較することは困難であるが、年次報告書に記載される科目ごとの履修者数を集計し順位で示したものが、表3である。

創立後10年間は理系科目の履修者数が上位を占めた

表3 メイソン科学カレッジにおける人文学部・理学部
科目履修者数順位

| 順位 | 1881-1891年 | 1892-1897年 |
|----|------------|------------|
| 1 | 化学 | フランス語↑ |
| 2 | 物理学 | 地質学↑ |
| 3 | 生理学 | 数学↑ |
| 4 | 数学 | 英語↑ |
| 5 | フランス語 | 物理学* ↓ |
| 6 | 地質学 | 化学* ↓ |
| 7 | 植物学 | ドイツ語↑ |
| 8 | 英語 | 英文学↑ |
| 9 | ドイツ語 | ラテン語↑ |
| 10 | ラテン語 | 工学↑ |
| 11 | 英文学 | 動物学↑ |
| 12 | 動物学 | ギリシア語↑ |
| 13 | 工学 | 植物学* ↓ |
| 14 | ギリシア語 | 冶金学↑ |
| 15 | 冶金学 | 生理学* ↓ |

注) 網掛けは「理学部」の科目, *印は医学部生が履修する科目を指す。

(出典: 引用文献3, p. 60より作成)

が、90年代以降は人文学系科目の履修者も増加傾向にある。1892年から医学校の合併により物理学、化学、植物学、生理学の履修者数は増加することが見込まれたが、相対的な順位は後退しており、文系科目の方が上昇傾向にある。

授業料収入の面では、1881年～1898年までの期間において、実験などの授業料が高額な理系科目が総収入の7～8割を占めた。しかしながら、1897年度には文系科目の履修者数が6割を占めるまでになり、履修者数の割合においては文理の勢力が逆転した³⁾。これは教員養成部が併設され教師資格を取得する学生が増えたことが影響している。

(4) 学生

市民大学の多くは、オックスフォードやケンブリッジのような詳細な入学者登録簿を作成しておらず、学生の学校歴、居住地、年齢、出身階層を分析することは非常に難しい。全学生が履修登録を記録する学生登録簿に住所を記入しているわけではないが、アイプス³⁾によると、1891年までカレッジで学ぶ学生の圧倒的多数は、バーミンガム市内から通学していた。1880年の最初の学生は、住所が分かる男性の82%、女性100%がバーミンガム

ム市内在住である。

男性の出身地は女性よりやや広範囲にわたるが、ブラック・カンントリー及びカレッジから20マイル以内の地域出身者が8割近くを占めていた。

学修の目的について、1893年冬学期を例にあげると³⁾、女性184名中、ロンドン大学学士学位試験志願者は6名、ロンドン大学の中間試験志願者が4名、90名が教師資格取得希望者である。男性156名のうち、ロンドン大学のMSc志願者が1名、学士学位(人文学)志願者が4名、学士学位(理学)志願者が7名、中間試験志願者が23名、化学カレッジ希望者が7名、その他の資格試験志願者が9名である。

カレッジは、昼間の講義コースを履修する学生を「系統的」学生(systematic students)とし、夜間クラスや一般向け講義の受講者と区別し集計していた。図5は1886年～1898年までのメイソン・カレッジの学生総数と「系統的」学生数の推移を示したものである。

「系統的」学生が、総学生数のおよそ半数を占めているが、実際にロンドン大学の学位取得を目指すためには、昼間の講義コースを3科目以上、少なくとも3年間は履修する必要がある、そうした学生は少数である。メイソン科学カレッジで学び、ロンドン大学の学位を取得した学士課程レベルの学生数は、表4の通りである。

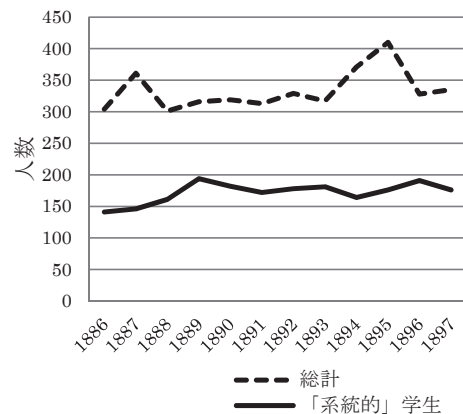


図5 メイソン科学カレッジの学生数(1886-98年)

(出典: 引用文献3, p. 57より作成)

表4 メイソン科学カレッジのロンドン大学学位試験合格者数(1881-98年)

| | 入学登録 | 中間学位試験 | | | 最終学位 |
|--------|------|--------|----|----|------|
| | | 人文 | 科学 | 医学 | |
| 1881-9 | 151 | 25 | 28 | 24 | 32 |
| 1890-8 | 179 | 41 | 59 | 40 | 91 |

(出典: 引用文献3 p. 58より作成)

ロンドン大学の学士課程学位試験は3段階に分かれており、入学登録試験、中間試験、学位試験の3つの試験に合格する必要がある。カレッジ創立から1898年までの学士学位取得者の総数は123名である。開学から1898年まで、年間の平均学位取得者数は10名にも満たない。もっとも合格者が多かったのは中等教育修了レベルの入学登録試験である。カレッジの学生の大半は学位取得を希望せず「初級」クラスを受講していたか、必要な科目を必要に応じて履修するパートタイム学生であったと考えられる。

5. バーミンガム大学創立への道のり

(1) 地域における主要高等教育機関としての戦略

これまで見てきたように、カレッジは開学時から財政難に悩まされてきた。カレッジは地域産業に役立つコースを設置したり、一般向け講座を開講するなど、学生数の増加に努力していたが、独自の学位授与権をもたないため、十分な学士課程レベルの学生を引き付けることができなかった。この苦境を打開するためには、新しい段階に進む必要があった。早くも1880年代後半にカレッジの将来について、公の場で構想を語った人物が二人いる。一人は、メイソン科学カレッジの化学教授ティルデン (Tilden, Sir William Augustus, 1842-1926) であり、もう一人はケンブリッジ大学の近代史教授シーリ (Seeley, Sir John Robert, 1834-1895) である。

ティルデン⁸⁾は1886年度の始業のために学生、教師が集まった場で、次のように述べた。率直に言って、現在のカレッジの教育水準は大学の名に値しない。カレッジにはわずかな学生と教師しかおらず、カリキュラムは限定されており、そこでの教育は「私的な授業・指導」の域を超えていない。しかし、今後カレッジがめざすべきは、学位授与権の獲得しかない。そのための方策として、ティルデンは、ミッドランド連合制大学の創立、既存の連合制大学 (ロンドン大学またはヴィクトリア大学) への加入、単独の大学昇格の3つを示した。

翌年の1887年、シーリ⁹⁾はバーミンガム・ミッドランド・インスティテュートで講演し、次のように述べている。バーミンガムはオックスフォードやケンブリッジのような学寮制大学をめざす必要はない。むしろ、ドイツやスコットランドの大学を範とすべきである。大学は学問の場であり、学寮のもつ人格形成の機能は必要ない。

このとき、カレッジがおかれていた状況、イングランドの高等教育をめぐる状況のいずれの観点からも、メイソン・カレッジによる学位授与権獲得が実現するとは誰も考えていなかった。転機となったのは、クイーンズ・カレッジの合併による医学部の誕生である。医学生に

とって学位取得は必須であり、学位へのアクセスを保障することはカレッジの重要な課題となった。また、ロンドン大学改革運動が頂点に達し学外学位の先行きが不透明となっていたことも、ロンドン大学以外の学位への道を模索する契機となった。

当初、カレッジ関係者の多くは、ヴィクトリア大学をモデルとしたミッドランド版の連合制大学を構想していたと考えられる。ヴィクトリア大学はマンチェスターのオウエンズ・カレッジ、リヴァプール・ユニヴァーシティ・カレッジ、リーズのヨークシャー・カレッジのイングランド北部の3カレッジから構成される連合制大学である。

1894年にはカレッジの評議会において、「ミッドランド大学推進協会」が組織され、この構想が具体的に検討されることになった。教育水準を適正に保ち、学位の価値を維持するためには、バーミンガム単独での大学昇格は不可能であり、近隣のエデュケーション機関との連携が欠かせない。しかし、連携先の候補となるブリストルやノッティンガムにも「大学」に値する教育水準や教員を備えた教育機関は存在しない。大学として必要な学部学科の施設設備、教授陣を揃えるには、少なく見積もっても数万ポンドの基金が必要とされる。資金を用意するめどはなく、しかもこのときメイソン科学カレッジは、カレッジとしての勅許状を受けておらず、法人格を有する教育機関でさえなかった。昇格のための活動は机上の議論で終わった。

(2) チェンバレンの大学構想

1896年、理事会は議会法によるカレッジの法人化、評議会はヴィクトリア大学への加入を目指し、それぞれ検討を開始した。ヴィクトリア大学との提携はきわめて現実的なプランであったが、理事の一人であるチェンバレンが反対を表明したことによって議論の方向性は大きく変化することとなる。

ヴィクトリア大学に加わればカレッジは地方の一学校となり、バーミンガム市民の感情とは相容れない。しかしながら、ミッドランド大学構想も時期がよくない。大学創設には多額の資金が必要だが、おりしもバーミンガムでは病院設立基金の運動が行われた直後だったのである。以上の観点から、チェンバレンは1、2年のあいだ時機を待つべきであると主張した。

地理的に近い既存の連合制大学への加入は、学位へのアクセスを確保するという意味では望ましい解決策である。しかしながら、ヴィクトリア大学の中核はマンチェスターであり、学位の取得先がロンドンからマンチェスターに代わるだけでは、市民のカレッジへの関心は高まらず、学生数の増加は期待できない。

チェンバレンの提案を契機として、カレッジ内からさまざまな大学構想が打ち出されたが、そのほとんどはヴィクトリア大学のミッドランド版、すなわちミッドランドにおける連合制大学を前提とするものであった。連合制大学から、単一大学への方針転換を図ったのもまた、チェンバレンである。

チェンバレンはユニテリアンで、ロンドン出身の産業家であった。バーミンガム市長を務めたのち、1876年に下院議員として中央政界に進出、第2次グラッドストーン内閣通商大臣、自治大臣を経て、1895年の第3次ソールズベリ内閣では植民地相に任命された。地元の声望は高く、バーミンガム、ウェストミンスターのいずれにおいても大きな影響力をもつ政治家であった。

チェンバレンは1896年にグラスゴー大学の総長^{注2)}に選出され、翌年スコットランドを訪れている。この経験がチェンバレンにスコットランド・モデルに基づく「バーミンガム市民のためのバーミンガムの大学」というアイデアをもたらししたといえる。限られた財源しかなく、学位授与権のない状態では、メイソン・カレッジに今以上の発展は望めない。将来的に、学位授与権は必須であるが、それは「隷属的」ではない形で獲得されなければならなかった。

チェンバレンが提示した新大学構想とは、都市と市民のための大学であり、独創的研究を行い地元の産業の牽引役になる大学である。市民にとっての大学の利点、誇りを強調することによって、チェンバレンは大学設立に必要な基金を市民の寄付によって集めようとしたのである。1898年に法人化され、新しくなった理事会の第一回会合で、大学昇格運動が提案、可決され、大学設立に必要な基金の目標額は、25万ポンドに設定された³⁾。

(3) 大学の創設

チェンバレンがこの設立資金募集活動に最大級の貢献をしたことは疑いない。かれはロンドンの自宅で資金集めのパーティーを主催し、バーミンガム滞在中はどんな小さな会合にも出席し寄付を呼びかけた。とくに裕福な家庭の出身というわけではなく、下院議員が無給であった時代に、彼自身も2,000ポンドを寄付している。さらに、植民地とのコネクションを生かし、カナダの鉄道王ドナルド・スミスやアメリカの鉄鋼王カーネギーから多額の寄付を獲得した。

バーミンガム市民の熱意と都市の誇りをかけた熱心な活動によって、わずか1年後には寄付金は目標額に到達し、最終的には32万6,500ポンドに達した。ブラック・カントリーの製鋼業者ホールクロフトやチェンバレンのかつての政敵カルソープ卿などの大口寄付者もいたが、富

表5 旧大学と市民大学の比較

| 旧大学 | 市民大学 |
|----------------|---------------|
| エリート主義 | 民主主義 |
| 大学人による運営 | 大学人と市民代表による運営 |
| 全国的 (national) | 地方的 (local) |
| リベラルアーツ | 実用的、専門教育 |
| 教育志向 | 研究志向 |

(筆者作成)

裕層の少ないバーミンガムで寄付金集めに貢献したのは市民であった。

1900年、学位授与権を認める勅許状が与えられ、バーミンガム大学が誕生する。最初の市民大学であるバーミンガム大学は、従来のイングランドの大学とは異なる次のような特徴を有していた。

バーミンガム大学は、都市の産業・商業に役立つ教育研究を推進するという明確な目標を掲げ、市民に奉仕する大学をめざした。大学運営には市の代表が参画し、地方政府から財政支援を受けている。勅許状が保証する大学の独立性、自律性によって、バーミンガム大学はどのような学生に、どのようなプロセスを経て学位を授与するのかを自ら決定できることとなった。ロンドン大学をはじめとする学外機関のシラバスによって決められた教育ではなく、バーミンガム市民のための教育を実行する自由を得たのである。連合制からの離脱と単独の学位授与権はまた、大学の学位の価値を大学自らが保証しなければならないことを意味した。

6. おわりに

19世紀イングランドでは長いあいだ、一つの大学に複数の教育機関が提携する連合制大学が主であった。学位授与における連合制の原理は、学位の質・水準を維持する上で重要な役割を果たした。しかしながら19世紀末には、それぞれの教育理念に基づいた教育実践を阻害し、シラバスを固定化すること、学位へのアクセスが容易でないことから、連合制大学への批判が高まっていく。

財政基盤が弱く設立間もない高等教育機関にとって、安定した学生数を確保し、各大学の理念に基づく教育を自律的に行うためには、単独の学位授与権を有する大学への昇格は必須条件である。バーミンガム大学はバーミンガム市民のためのバーミンガムの大学となることを標榜し、幅広い市民の支持を得て大学昇格に必要な基金を集めた。市民大学は伝統的な大学とは異なる地方大学として、地域の学生や産業ニーズに奉仕する新しい大学の

あり方を模索したといえよう。

しかしながら、試験と教育の機能分化による学位の質保証がなくなれば、各大学でそれぞれ学位の質を保証する必要が生じる。授業料収入への依存傾向が高い場合、入学者の質の確保が困難となり、学士課程教育の質が維持できないことも起こりうる。市民大学がどのように学生教育や学位の水準を維持し、質を保証したのかについては、稿を改めて論じたい。

付記 本稿は平成27年度科学研究費助成（研究課題番号：25381055）の成果の一部である。

注

- 1) 19世紀末から20世紀初頭に設立され、第一次世界大戦以降に大学昇格したユニヴァーシティ・カレッジが、市民大学の第二波と呼ばれることもある。レディング（1926）、ノッティンガム（1948）、サザンプトン（1952）、ハル（1954）、エクセター（1955）、レスター（1957）
- 2) 総長（Rector）は中世では大学の実質的な長であったが、徐々に名誉職的な意味合いが強くなっていった。グラスゴー大学では1858年から3年に一度、学生の投票で選ばれるようになった。

引用文献

- 1) Whyte, William, Redbrick: a social and architectural history of Britain's civic universities, Oxford University Press, pp. 1-389, 2015.
- 2) 横尾壮英『大学の誕生と変貌—ヨーロッパ大学史断章—』東信堂, pp. 1-258, 1999.
- 3) Eric Ives, Diane Drummond, Leonard Schwarz, The first civic university: Birmingham 1880-1980: an introductory history, The University of Birmingham, pp. 1-462, 2000.
- 4) Sheldon Rothblatt, 'Historical and comparative remarks on the federal principle in higher education', History of Education, vol. 16, no. 3, pp. 151-180, 1987.
- 5) R.D. Anderson, Universities and elites in Britain since 1800, (Studies in economic and social history) Macmillan, pp. 1-77, 1992.
- 6) Oxford Dictionary of National Biography (<http://www.oxforddnb.com/view/article/18286>).
- 7) Mason Science College, Birmingham, Calendar for the session 1887-1888, Birmingham, 1887.
- 8) UC7/iv/1, Lectures: Tilden (1886).
- 9) UC7/iv/1, Lectures: Seeley (1887).